

2025 年 10 月 18 日

第 61 回加藤周一文庫公開講読会 『続 羊の歌』を読む

偽善（後半）

日本学術振興会特別研究員
立命館大学授業担当講師
猪原 透

【本章の梗概】

本章では加藤周一のイギリス旅行中の経験が描かれる。内容は大きく前半と後半に分けられるが、いずれもタイトルにある「偽善」に焦点があてられている。

前半ではまず、加藤と英国の知識人との交友が描かれている。彼らの多くは《田舎暮らし》を好み、文学や芸術に関する深い見識をもつ一方で、国内外の政治問題に対しても浅薄ではない独自の意見をもっていた。そうした人たちは、同時代の東京には見られなかった。また、《道義》と《政治》のつながり方が、英国人とフランス人とでは違っていることに加藤は気づく。そうして加藤は、自らの《道義》が絶対的なものでないことを自覚しつつ、現在の政治状況のなかで何ができるのかを問い続ける「偽善」の態度を身につけた（政治的な偽善）。

後半では加藤と「愛する娘」（ヒルダ・シュタインメッツ）との関係が描かれる。「京都の女」を日本に残してきた加藤は「愛する娘」との関係をいつまでも続けることはできないと考え、彼女と会う最後の機会にすると決意してスコットランド・エディンバラへの旅に出発する。その旅で泊まった宿では「結婚していない男女は同じ部屋に泊まることができない」と告げられ、加藤は「何という偽善的な習慣だろう」とつぶやきながら、西洋における教会の巨大な影響力を実感する（習慣的な偽善）。また、エディンバラではセザンヌの展覧会をみて感銘をうけた。

旅が終わり、加藤は「愛する娘」と別れてフランスへと戻っていく。加藤は別れる決意を抱いたまま、フランスに着いてもこれまでと変わらず「愛する娘」に手紙を出すことを約束する。だが、「変わらぬ永遠の愛」を誓うことが「偽善」であるように、愛する娘と別れるという決意が決して変わらないと想像することも「偽善」ではないかと加藤は自問する。だからこそ、フランスに帰っても加藤は「愛する娘」に手紙を書かず、彼女との連絡を絶った。

【前章と本章の関係】

・対比的な構成になっている。

海峡の彼方：都市（舞台）、イギリスの外国人（人物）、文学（話題）

偽善：農村（舞台）、イギリス人（人物）、政治（話題）

・それぞれの章の前半と後半で話題が変わる点は共通。

前半：イギリスで出会った（好ましい）人物＋加藤がどのような見方を獲得したのか

広範：イギリスの（あまり好ましくない）社会習慣＋加藤の内省

【第7段落】「政治」と「道義」の関係：「偽善」の価値

おそらく英国で私は政治についての特定の考え方ではなく、むしろ政治に対する一種の態度を覚えたのであろう。①道義の感情と直接にむすびつけて政治問題を考えぬ態度——それは政治問題を根本的には道義の感情に即して考えることをやめないために、どうしても必要であったように思われる。英国人の考えそのものは、むろん、人によって大いにちがう。しかし彼らの話し方には、ほとんど独特の様式があった。②対象からの知的距離と、価値への自己拘束的志向との、微妙なつり合い。英国の外交政策が、他の国の場合よりも、「偽善」的であったかどうかは大いに疑わしいが、もしかりにそうであったとすれば、それは一国の外交政策に望み得る最上のことであったろう、と私は考える。けだし「善」の値うちをみとめなければ、「偽善」の必要もまたないはずである。現にヒトラーの政治は、「偽善」的ではなかった。またみずからの「善」を確信し、相手の「悪」を疑わなければ、「偽善」の余地もない。現に反共十字軍を唱えていたダレス氏は、盲目的ではあっても、「偽善」者ではなかった。

①「道義の感情と直接にむすびつけて政治問題を考えぬ態度——それは政治問題を……」

・加藤にとって政治問題への関心は「道義の感情」から生じるものである。たとえば「古きよき日の思い出」の章では、ヴェトナム戦争で25万人の子供が殺されていることについて「そんなことは知りたくない」「知ったところで、どうしようもないじゃないか」という「旧知の実業家」と、「それでも知っていたい」という加藤のやり取りが描かれている。

「前者がまちがっているという理くつは、私にはない。ただ私は私自身が後者に属するということを感じるだけである。しかじかの理くつにもとづいて、はるかに遠い国の子供たちを気にしなければならぬということではない。彼らが気になるという事実がまずあって、私がその事実から出発する、または少なくとも、出発することがある、ということにすぎない」

・あとの「審議未了」の章でも、やはり「道義感」(＝「いくさ」によって他人に死を強制することは正しくない)から出発することが語られている。「いくさ」を避けるためにどのような手段をとるべきかは、道義感とは無関係の情勢判断と理屈の問題である。しかし、それゆえにこそ、その時・その場所においてより良い手段を探し続けなければならない。

②「対象からの知的距離と、価値への自己拘束的志向との、微妙なつり合い……」

・対象からの知的距離＝「こうであるべき」という希望や、「こうであってほしい」という希望的観測に左右されず、対象と距離をとって現実を客観的に分析しようとする意志。

・価値への自己拘束的志向＝「こうするべきだ」という意識＝道義感

・英国の外交政策が、現実を客観的に分析し、その中でできること(相対的な善)を実現しようとするものであるとするなら、それは「絶対的な善」ではないことを自覚しつつ行われる善＝偽善である。だが、それは「善」を目指そうとしない外交(ヒトラー)よりも、「絶対的な善」を押しつけようとする外交(ダレス氏)よりも勝る。

【第8段落】習慣上の偽善(1)：エディンバラへの出発

①英国での私の生活は、数ヵ月経って、いよいよ苦しくなった。しかしさしあたりロンドンで必要な金を調達する方法はなかった。私はパリへ帰ることを考え、そこでひとりで暮すことはできるだろうが、二人で暮すことはできないだろう、と考えた。私はフィレンツェで別れたときにも、それが最後になるだろうと思った。ウィーンの西駐車場の汽車の窓から、彼女の後姿を見送ったときにも、それが見収めになるかもしれないと思った。そういうことを、いつまでもくり返しているわけにはゆかない。英国を去るについては、どうしても態度をきめておかなければならなかった、将来二人で暮すことを考えてしかるべき方法を講じるか、そうすることができなければ、最後の機会をほんとうに最後の機会とするか。②京都で私の帰りを待っている女は、私の歐洲へ去ろうとしたときに、一言の反対もしなかった。もし彼女が強く反対していたら、私はおそらく歐洲へは来なかったろう。私には他人の好意を、当人の不利になるように利用したくないという考えもあった。殊にその人が遠く離れていて、みずからその立場を護ることのできない場合にはなおさらである。③私は英国を去るまえに、中世の教会を見ながら、エディンバラまで行き、それを愛する娘との最後の機会にしようと決心した。

①「英国での私の生活は、数ヵ月経って、いよいよ苦しくなった。しかしさしあたり……」

・加藤は日本の新聞（『西日本新聞』など）への寄稿や、通訳の仕事の報酬を生活の資としていた。前者はともかく、後者の仕事を一時的な滞在先（イギリス）で見つけることは難しい。また、詳しくは次章で語られるが、パリに帰ることで国立の研究所で働き口を得られる可能性はあったが、二人で暮らせるだけの収入が得られるかは定かではなかった。

②「京都で私の帰りを待っている女は、私の歐洲へ去ろうとしたときに……」

・「京都の女」は実在しないが、モデルになったのは東京で加藤の帰りを待っている妻。
・「京都の庭」の章には以下のようにある。「もしそのとき京都の女が、私の外国へ去ることに強く反対していたら、おそらく私は出かけなかったかもしれないし、出かけなければその後の私の生涯も、変っていたはずであろう。しかし彼女は反対しなかった。私を引きとめようとしなかったばかりでなく、私の旅行について一言の不平もいわなかった」

③「私は英国を去るまえに、中世の教会を見ながら、エディンバラまで行き……」

・「最後の機会をほんとうに最後の機会とする」ため、加藤はヒルダとの旅に出た。
・エディンバラはスコットランドの中心都市。ロンドンから北へ、途中の街で教会をみながら鉄道で移動したとみられる。後述するようにエディンバラ国際フェスティバルの開催される夏の時期であった（2025年は8月に開催）。
・「中世の教会を見ながら」とあるのは、実際に教会の建物を見ながら旅したことと、このあと「男女の私生活に教会の干渉する範囲が広すぎる」ことを印象づけるためだろう。

【第9段落】習慣上の偽善（2）：教会の影響力

私たちは、英国ではじめて長い旅に出た。①②どこの宿屋でも、主人は、うさん臭さそうに私たちをみくらべながら、「結婚していない男女は一部屋に泊ることができない」と宣言した。「一部屋をもとめているのではない、二部屋があるか、と訊いているのだ」と私は怒鳴った。「何という偽善的な習慣だろう」と私は呟き、「英国にかぎったことではない」と彼女は註釈した。しかし日本ではそういうことがない、宿帳の記載は、「他御一名様」を以て足りる。③いや、そればかりではなく、たとえば妊娠中絶も、途方もない金を払ってもぐり医者の危険を冒さずに、必要があれば、設備のととのった病院で安く行うことができる。離婚も、夫婦の合意があれば、いつでも成りたつだろう。歐洲の多くの国において、それだけのことも、容易に行われないのは、男女の私生活に教会の干渉する範囲が広すぎるからである。④「日本へ行ってみたい」と彼女はいった。

①雑誌連載時にはあったが、書籍化の際に削除された文章

「二人ともそういうことには慣れていなかった。日曜日の二等車の客は、昼になると、持参の弁当を食べていたが、私は「食堂車に行こう」といった。しかし食堂車はついていなかった。「駅で何かを売っているはずです」と彼女はいったが、どこの駅でも、売店は閉まっていた。私たちは、汽車を降りて、宿をみつけるまで、飲まず食わずの旅をつづける他はなかった。」

- ・この段落の論点（偽善的な習慣）とは無関係だと判断して削除したのではないか。

②「どこの宿屋でも、主人は、うさん臭さそうに私たちをみくらべながら……」

- ・伝統的なキリスト教倫理に基づき、宿屋は婚前交渉をさせないために「決婚していない男女は一部屋に泊まることはできない」と宣言。
- ・しかし、二部屋をとれば未婚の男女でも宿泊することはできるし、婚前交渉に及ぶことも難しくない。そのことを承知のうえで二部屋を貸すのは「偽善的」である、ということか。

③「いや、そればかりではなく、たとえば妊娠中絶も、途方もない金を払って……」

- ・キリスト教倫理の強い欧米諸国では妊娠中絶は厳禁とされてきた。イギリスで妊娠中絶が解禁されるのは1967年のこと。妊娠中絶が厳禁であっても当然のことながら需要はあるので、非合法の医者には大金を払わねばならない。
- ・日本で妊娠中絶が解禁されたのは1948年（禁止されていたのもキリスト教のためではない）。離婚についても欧米諸国の多くで制限があるのに対し、日本ではそうではない。

④「日本へ行ってみたい」と彼女はいった」

- ・次章でヒルダが日本へ行く決意をするのを自然にみせるための伏線。また、教会に対するヒルダの考えが加藤と近いものであることを示している。

【第 10・11 段落】習慣上の偽善 (3)：信仰についての加藤の立場

①思えば私のキリスト教は、ながい間、「アリストテレス神学」や「資本主義の精神」とむすびついた遠い国の歴史であった。②たしかにダレス氏は、《神無き国》征伐の説を唱えて、十字軍や異端火あぶりの昔を思い出させてくれたが、それも私の日常生活と直接の関係はなかった。日本での私は、教会のおかげで迷わくを蒙ったことが一度もない。日本のキリスト教信者は、少数で、無力で、選挙に干渉せず、権力の内部に浸透せず、国民の風俗習慣と私生活に全く介入しない。江戸時代以来、軍国日本において、風俗取締りに乗りだすのは、教会ではなくて、仏教寺院でさえもなく、常に国家権力そのものであった。③しかしキリスト教とその教会を、アリストテレスの遺産や資本主義の精神との関係において評価する代りに、宿帳や妊娠や離婚との関係において眺めれば、おのずから別の結論に導かれざるをえない。西洋の教会は、昔、ガリレオを殺しただけではない。今でも、その巨大な影響力によって、何人の不幸な娘を自殺に追いやり、何組の憎み合う夫婦をその地獄にしばらくつけているか、測り知ることができない……④私はパリで隣の家の子供と話した時のことを、思い出した。子供はまだやっと話しはじめたばかりで足もともおぼつかなかった。「そんないたずらをしてはいけない」と私はいった。子供は、少し怯えたように、大きな眼を見開いて、私をみつめながら、うなずいた。「お母さんの見ていないところでも、悪いことをしてはいけないよ」「見ていないところでも、悪いことはしません」と子供はいった。「どうしてだ?」「神さま(ボン・デュー)が見ているから」「家の外でも?」「家の中でも、外でも、いつでも」「神さまはどこで見ているのだろうか」と私がいうと、その子供は少しもためらわず、小さな腕を頭上にさしあげて、真剣な顔をしながら、「高いところで」といった。私は微笑した。するとその子も、顔中をほころばせた。その顔は実にいうべからざるよろこびに溢れていた。……

⑤「あなたは神を信じているの?」と彼女は訊いた。「いや、信じてはいない、しかし他人が信じていることに反対はしない」「その人があなたにも信じることをもとめたら?」「放っておいてくれ、というだけだ」「あなたらしい」と彼女はいった。

①「思えば私のキリスト教は、ながい間、「アリストテレス神学」や……」

・「アリストテレス神学」は西洋中世のカトリックがその神学を組み立てるときに使った骨組みとしてのアリストテレスの哲学のことを、「資本主義の精神」はマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のことを指すとみられる。つまり加藤はキリスト教を、一方では古代(アリストテレス)と、他方では近代(資本主義)と結びつけて考えてきた、という意味。しかしそれは「歴史」であって、「現在」ではない。

・加藤とキリスト教の関係は、幼少期に入ったカトリック系の幼稚園から始まる。ただしそのとき加藤の印象に残ったのは「黒衣の西洋人や、礼拝堂の鐘や、俄かに校庭を埋める制服の娘たちの、異様で強烈な感覚的印象だけであった」(『羊の歌』『渋谷金王町』)。

・その後、加藤は東京帝国大学在学中に吉満義彦の講義を聞いたことをきっかけに、カトリック神学に関心をもつ（『羊の歌』『仏文研究室』）。また、戦後にはフランスにおける「抵抗の文学」のなかでカトリックの作家が果たした役割に関心をもった（『続羊の歌』『一九四六年』）。

・青年期の加藤にとってキリスト教（主としてカトリック）の魅力は、「理路整然とした合理主義的体系」のもつ美しさであり、また「罪の底に深く沈めば沈むほど救いに近づくという逆説」のもつ精巧な力学にあった（『仏文研究室』）。「アリストテレス神学」は理路整然とした合理主義的体系に、プロテスタントの禁欲が資本主義の「精神」に適合性を持っていたという「資本主義の精神」は「逆説」にそれぞれ対応しているようにもみえる。

②「たしかにダレス氏は、《神無き国》征伐の説を唱えて……」

・アメリカの国務長官ジョン・フォスター・ダレスは、キリスト教的善を体現するアメリカと無神論的悪を体現する共産主義国を対比し、共産主義国への妥協のない政策を進めた。

・政治を通してキリスト教の影響を意識することはあったが、日常生活の関係は薄かったし、キリスト教の否定的な側面を見ない「プラトニック・ラヴ」であった。

「その後現代のトミストとカトリック作家が、大学生の私をひきつけたが、私はその間に、一度も教会へいったことがなかったし、礼拝に出たことも、説教を聞いたことも、一人の宣教師と話したこともなかった。〔中略〕私はカトリシズムに一種の《プラトニック・ラヴ》を抱いていたのかもしれない。一しょに住んでみれば——愛憎共に奇麗事ではすまなくなるのが、人情の自然である。」（『仏文研究室』）

③「しかしキリスト教とその教会を、アリストテレスの遺産や資本主義の精神との……」

・キリスト教を、アリストテレスの遺産を受け継ぎ、近代の資本主義を準備したものとしてみれば肯定的な評価となるが、現在の習慣との関係においてみれば否定的な評価となる。

・「昔、ガリレオを殺した」は比喩的な意味であろうが（雑誌掲載時には「ガリレオを放した」となっていた）、「何人の不幸な娘を自殺に追いやり、何組の憎み合う夫婦をその地獄にしばりつけているか、測り知ることができない」というのは、キリスト教倫理による妊娠中絶・離婚の禁止を否定的に評価したもの。

④「私はパリで隣の家の小さな子供と話した時のことを、思い出した」

・本当にあった出来事であるかは別として、小さな子供との会話はどのような意図をもって描かれているのだろうか。やや深読みすれば、以下の二つの意図があったと考えられる。

・第一に、キリスト教倫理が小さな子供にまで広く、深く浸透していることを示すこと。加藤が小さな子供にどのような反応を期待していたのかはよくわからないが、どうしていたずらをしてはいけないのかという加藤の問いに、小さな子供は「少しもためらわずに」高いところから神が見ていると答えている。

・第二に、神を信じない加藤自身を相対化するため。価値相対主義者である加藤は、この段落の前半でキリスト教を絶対的な価値とする見方を退け、むしろその否定的側面を強調している。しかし後半では、神を素朴に信じる子供の顔が「実にいうべからざるよろこびに溢れていた」と述べている。これは、神を素朴に信じるのがかえって人生の幸福につながる、という別の見方を示唆しているようにみえる。

⑤ 「あなたは神を信じているの？」と彼女は訊いた。……」

・加藤自身の宗教に対する態度が端的に語られている。亡くなる直前を除けば加藤自身が特定の宗教に入信ことはなかったが、どのような価値判断も根底には知識によって基礎づけられるのではない信念があると考えていた加藤にとって、他人の信仰を否定する理由はなかった。

「生きてゆくかぎり、私は、成立の事情の明らかなでない私自身の信念から、出発するほかはない。同じことは、私以外の、また殊に私の属する団体（たとえば日本国、その中産階級など）以外の、誰にも通用する。したがって私は、私の信念をまもるために、私自身が他人を殺すことを正当化できない。中産階級は労働者の犠牲において繁栄することを、日本帝国主義は他民族を隷属させることを、正当化できないだろう」（「私の立場さしあたり」）

【第12段落】加藤自身の偽善（1）：旅の終わり

①エディンバラは、音楽祭で賑っていた。照明された丘の上の古城は、夜の空のなかに鮮かに浮きだし、遠くからスコットランドの軍楽隊の笛の音が聞えていた。歌劇の切符を手に入れることはできなかった。しかし私たちは、街を歩き、音楽会を聞き、芝居を観、また英米の蒐集から折んだ②セザンヌの展覧会を見た。陳列された作品の量と質、年代的な配列の仕方と照明、そのすべての点において、その展覧会は素晴しかった。私ははじめてセザンヌという現象の意味を理解した、と思い、そのことに興奮した。それは、西洋の近代絵画の歴史のなかで、はじめにジョットオがあり、その次にはセザンヌがあったということである。③「この旅が終るかと思うと、悲しい」と彼女はいった。④ロンドン、地下鉄、シティーの灰色の壁、下町の言葉の抑揚、朝早く事務所の掃除に出かける年とった女たち、チェルシーの河岸の日曜日、《伯母》の神経痛、《I bin alt, you know……》——「パリへ行ったら手紙を下さい」と彼女はいった。「もちろん」と私はいった。「一週間に一度」「もちろん」と私はもう一度いったが、⑤海峡一帯の水を越えれば、そこには別の世界があるだろう、と考えていた。周囲の世界から独立して、そもそも「私」というものがあり得るだろうか。その「私」とは一体何ものであろうか。「変らぬ私自身」を想像することよりも大きな「偽善」があるだろうか。⑥現に日本を発った後に、私のなかでいちばん変らぬと思っていた部分さえ変ったではないか。再び会わぬ決心をまもるためには、手紙を書いてはならないはずであった。

①「エディンバラは、音楽祭で賑っていた。照明された丘の上の古城は……」

・加藤が訪れたエディンバラでは、1947 年以来毎年「エディンバラ国際フェスティバル」が開催されている。オーケストラ、オペラ、演劇、コンテンポラリーダンスなど様々な公演が街の各所で行われる。エディンバラ城内では「ミリタリー・タトゥー」（軍楽隊による分列行進）が行われる。「遠くからスコットランドの軍楽隊の笛の音が聞こえていた」というのはミリタリー・タトゥーの音が城外にまで響いていたということだろう。

②「セザンヌの展覧会を見た。陳列された作品の量と質、年代的な配列のし方と照明……」

・セザンヌ（ポール・セザンヌ）は 19 世紀後半のパリで活躍した、のちのキュビズムのような現代絵画に影響を与えた「ポスト印象派」の画家として知られている。

・ジョット（ジョット・ディ・ボンドーネ）は 13 世紀後半から 14 世紀前半のイタリアで活躍した。平面的で様式化された教会の宗教画のなかに、奥行きのある表現、活き活きとした写實的描写を導入し、ルネサンスの先駆となった画家として知られている。



左：セザンヌ『果物籠のある静物』（1888—90 年、オルセー美術館）

右：ジョット『ユダの接吻』（1305 年ごろ、スクロヴェーニ礼拝堂）

「セザンヌが油絵の新しい描き方を発明したのは、りんごを描きながらであった。りんごとは、新しい画題ではない。新しい題材が新しい手法を要求するという俗説を、セザンヌの場合ほど徹底的にうち破った例も少なからう。いや、さかのぼって、中世絵画から近代絵画への移行、手法上の発明、描き方の画期的な変化は、ジョットオが、中世絵画とちがう題材をとりあげたときにおこったのではなく、まさに中世以来のもっとも伝統的な題材を描いていたときにおこったのである」¹

・ここでセザンヌ、ジョットの話題を持ち出した意図は何だろうか？

¹ 加藤周一「芸術と形式」（『芸術論集』岩波書店、1977 年）、117 頁。

③「この旅が終わるかと思うと、悲しい」と彼女はいった」

・旅の終わりとともに二人の関係が終わることを、加藤だけでなくヒルダも意識していたことを示す文章。「この旅」はエディンバラへの旅行というより、二人の関係そのものを指していると読むこともできる。このあと、パリに戻ってから手紙を送るよう求めるのも同じ理由。

④「ロンドン、地下鉄、シティーの灰色の壁、下町の言葉の抑揚、朝早く事務所の……」

・ヒルダの「この旅が終わるかと思うと、悲しい」という言葉に反応して、イギリス旅行のあいだに見た印象的な風景、言葉を思い出している。ロンドンの街、移動に使った地下鉄、ヒルダが勤める投資会社のあるシティー、下宿屋のある下町（アールス・コート）の会話、シティーの事務所の清掃に出かける女たち、そしてヒルダが《伯母》と呼ぶ遠縁の女性（チェルシーの富豪の家で働いており、加藤たちをそこに招いた）との会話が列挙される。

・前章「海峡の彼方」で《伯母》は「英語とドイツ語の混った奇妙な言葉」を話したと書かれている。ここでも《伯母》のセリフとして、前半がドイツ語、後半が英語の《I bin alt, you know……》（私はもう年老いてしまったでしょう？）と書かれている。

・ここで加藤が想起した事柄や列挙の仕方には何か意図があるのか？

⑤「海峡一帯の水を越えれば、そこには別の世界があるだろう、と考えていた」

・周囲の世界が変われば、そのなかで生きる人間も変わる。「京都の庭」の章では「京都のひと女」に対し、留学から帰ってきたら結婚を考えようと言い、「そのとき彼女にいった言葉をみずから固く信じていた」が、その気持ちは変わってしまった。同じように、「変わらぬ」と信じた「私自身」（＝ヒルダと別れる決意をした自分）も、環境とともに変わってしまうだろう。

・加藤はエディンバラへの旅を最後にしてヒルダと別れる決意をしている。しかし、ドーバー海峡を越えて別の世界（フランス）へ行けば、その決意も揺らいでしまうかもしれない。そのとき手紙を出せば、いよいよ別れることはできなくなる。だからこそ、当初の決意を守るためには手紙を出さず、ヒルダとの関係を絶たねばならない。それができないことを知りつつ、手紙のやり取りをしながら別れる決意を保てるように装うのは、「偽善」ではないか。

・そのように考える加藤であっても、「パリへ行ったら手紙をください」というヒルダの懇願を拒絶することはできず、はっきり別れを告げることもできなかった。

⑥「現に日本を発った後に、私のなかでいちばん変らぬと思っていた部分さえ……」

・雑誌掲載時にはなく、書籍化の際に追加された箇所。

・ロンドンへの手紙を書かなかったことが、再び会わない決心を守るためであったことをはっきりさせるために追加したのではないか。

【第13段落】加藤自身の偽善（2）：

スコットランドから帰ると、まもなく私は英国を発った。①汽車のなかで久しぶりのフランス語を聞き、車窓にノルマンディーの風景が移るのを見た。澄んだ空気のなかで、樹の葉の一つ一つが、鮮かに区別して発音された音綴のように、初秋の陽ざしのなかにきらめいていた。②フランスは変わらなかった。私は絶えず別れて来た娘のことを考えていた。しかしロンドンへの手紙は、ながい間書かなかった。

①「汽車のなかで久しぶりのフランス語を聞き、車窓にノルマンディーの風景が……」

・雑誌掲載時には「はじめて汽車のなかで久しぶりのフランス語を聞いたときに、Normandieの風景が、英国の田園の風景とは全くちがうと思った」。書籍化の際に文章は変わったが、言葉と風景が渾然一体となった文章である点は同じ。風景は「鮮かに区別して発音された音綴のように」きらめいて見える。

・樹の葉のひとつひとつが「鮮かに区別して発音された音綴のように」見えたというのは、イギリスと比べてよく知る、慣れ親しんだ（それ故にはっきりと見える）世界に帰ってきた加藤の心象表現であろうか。

②「フランスは変わらなかった。私は絶えず別れて来た娘のことを考えていた。しかし……」

・「私は絶えず別れて来た娘のことを考えていた。しかし」の部分には書籍化の際に追加された文章。

・言葉と風景によって「フランスは変わらなかった」と感じる加藤。これに「私は絶えず別れて来た娘のことを考えていた」と続くのは、「フランスも、私も変わらなかった」（＝別れる決心などでできていなかった）という意味なのか、それとも「フランスは変わらなかったが、私は変わった」（＝イギリスでの決心が揺らいでしまった）ということか。

・いずれにせよ、「絶えず別れて来た娘のことを考えていた」が、関係を断つためにロンドンへの手紙は書かなかった。